「住民ディレクター」への招待状

生涯現役で地域を元気に――。それが「住民ディレクター」のミッションです。

目　　次

★地域おこし番組『ふらっと九州☆東峰村』……P1
☆注目の「村民みんなで創るテレビ」……P3
★災害時に大活躍する「住民ディレクター」……P5
☆テレビは「見るもの」じゃなくて「使うもの」……P7
★DX時代のメディア変革、胎動……P9
☆住民ディレクターとは「生き方そのもの」……P11
★「関係人口」と「オンライン交流」……P13
☆ひと、光る。國創り―。全国、世界へ……P15
★ブレないプロフェッショナル魂……P17
☆「Natural Media コミュニティ」の誕生……P19

▲東峰村宝珠山地区にある東峰テレビ（2F：福岡県のテレワークテラス宝珠）

未知との遭遇
――東峰村に光ケーブルテレビが舞い降りた！

2010年11月1日、 東峰テレビ開局特別番組の生放送が始まり、熊本県、東京都、千葉県などからも住民ディレクターが応援にかけつけ、その様子はインターネットでも配信されました。この山深い村にとって、この開局は“未知との遭遇”とも言える、驚くべき出来事でありました。

開局番組の実際の様子は、右のQRコード<1>からアクセスできますので、東峰村の住民ディレクターが初めて発信した番組を、ぜひ眺めてみてください。

福岡県中央部の東端、大分県との県境にある東峰村は、人口 1,750 名ほどの小さな村でありながら、全村に光ファイバーが敷設され、光ケーブルテレビがあります。

到達した地平には、新しい未来が広がっていた。

「住民ディレクター」の創始者である岸本晃は、全国各地で「住民ディレクター養成講座」をプロデュースしてきました。この岸本と東峰村の出会いは、2007 年から3年間、村の要請を受けて連続して開催した講座でした。その後、2010 年の夏には村へ移住し、メディア運営の構想から助成金の申請・確保まで、東峰テレビの開局に関わり、現在も総合プロデューサーとして活躍しています。

緊張することの少ない、スタジオ環境を実現。

住民ディレクターの活動拠点として、多くの番組を発信している東峰テレビ局のスタジオは、もともと診療所だった建物をそのまま活用しています。たとえば、フロアは簡易な敷物でおおうだけで、本格的な防音対応はほとんどしていません。一般のテレビ局では数百万円もの費用をかけるところですが、東峰テレビ局では10数万円で仕上げています。

ビデオカメラをはじめ、音響・映像機器、送信設備なども、誰でも簡単に操作できるように民生機を核にそろえています。このスタジオを動かすのは普通の村民なので、緊張した雰囲気を持たずに、失敗を恐れず気軽にチャレンジできることを大切にしているからです。

◀スタジオは静まり返らない!?
限りなく自由広場です

九州ローカルの東峰村から、新たな“ゆるふわ番組”を発信。

東峰テレビでは、新たな地域おこし番組『ふらっと九州☆東峰村』の全国配信をスタートしています。これまでの番組内容はYouTubeで見られます。何はともあれ、右のQRコード<2>からアクセスし、チャンネル登録して見てください。

ご覧の通り、ほんとにゆるふわな雰囲気で番組が進行しています。出演する住民たちは放送日当日、番組がどのように展開するのか分からないまま、局にやってきます。もちろん、それぞれに放送する内容は考えてきますが、ここから放送の本番までが、最もスタジオが活性化するときです。一般のテレビ局では1時間を超える生放送をするなら、早朝から数時間ものリハーサルを重ねますが、素人集団で番組づくりをする場合、集中できるのは1回だけです。何回もリハーサルすると、どんどん緊張感がなくなってしまいます。でも、一発本番生ライブだからこそ、飾らない本音の言葉で語られるから、視聴者の心にすっと届くのです。

▲全員のスマホ中継をオンラインアプリで繋ぐ画面

▼「ふらっと」立ち寄り「フラット」な関係にある交流拠点との意味

▲スタジオは様々な立場の老若男女が集まるコミュニティ広場

大きな可能性を内蔵した地域創生番組がスタート。

2017年7月5日に発生した九州北部豪雨の被害から、力強く復興してきた九州ローカルの東峰村。山深い村から発信される、鮮度のいい多彩な地域情報からは、少子化・高齢化の課題を抱えながらも、確かな未来をめざして邁進するコミュニティの息吹を感じてもらえるはずです。

この新シリーズの番組「ふらっと九州☆東峰村」が、ケーブルテレビとインターネット配信を組み合わせた地域創生番組として、爆発的な可能性を内蔵していることは間違いないことでしょう。

【☞地域の未来を輝かせる秘密、その1】
新しいコトには、いつも興味シンシン!!

村民みんなで創るから、常識を超える。

NHK大河ドラマの追走生番組を、全国ネットで同時配信。

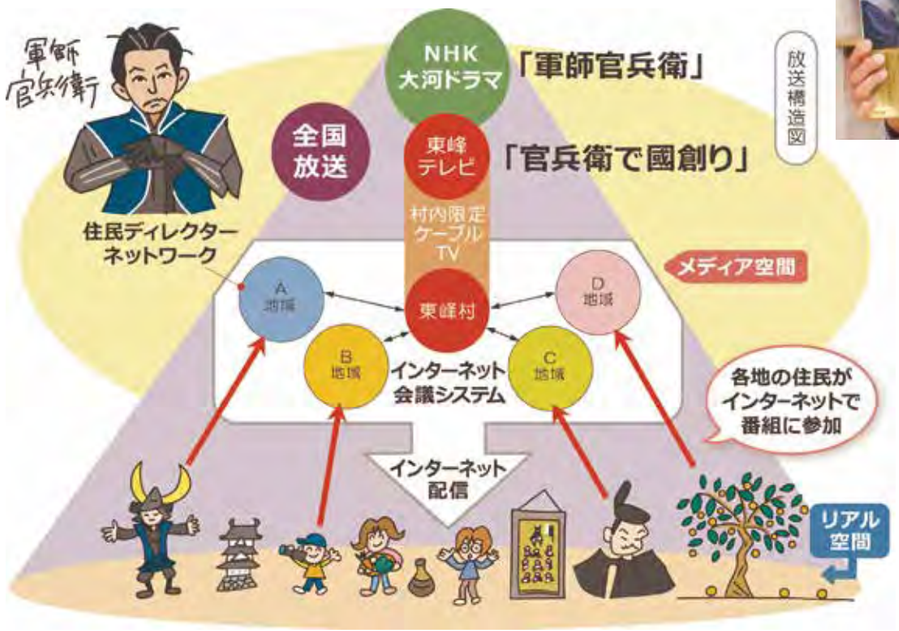
2010年に開局した東峰テレビは「村民みんなで創るテレビ」をスローガンに掲げ、村人有志の住民ディレクターを核として、数々の画期的な番組づくりに挑戦してきました。

2014年のNHK大河ドラマは岡田准一さんが主役の『軍師官兵衛』でした。第1回の放送が終わるのを待ち構えるように、東峰テレビのスタジオでは『住民ディレクター発！　官兵衛で國創り～NHK大河ドラマ追走番組～』が始まりました。黒田官兵衛は播磨に生まれ、晩年は福岡を領地としたため、東峰村近辺にも黒田家にゆかりの事物が多く残されています。こうした地域の歴史や人を追いかける番組を構想し、スタジオに関係者が集い、インターネット中継で全国を結び、各地の住民ディレクターが参加する方法を模索していきました。

全国どこからでも東峰村の生番組に参加できると同時に、その映像を東峰村限定のケーブルテレビと、全国で視られるネット上に同時配信する仕組みが必要でした。そこで、当時はまだ知られていなかったUstreamというインターネット動画共有システムを採用し、全国ネット中継を実現したのです。

▲1年間52回、毎週のNHKの放送を追走して生中継

▲NHK番組で岡田准一さんだから全国の関心が繋がった



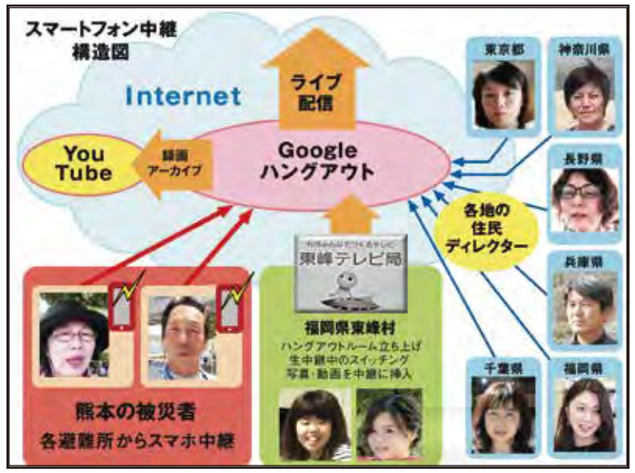
◀放送(NHK)と通信(全国各地域)を地域おこしで融合した仕組み

熊本地震の被災当事者による、スマホ中継の可能性。

2016年4月16日の深夜、マグニチュード7を超える激震が熊本県・大分県西部を襲いました。この震災で被害が最も大きかった益城町に自宅のある岸本、熊本市の澤啓子をはじめ、「NPO法人くまもと未来」の住民ディレクターたちが被災者となってしまいました。翌朝、岸本はフェイスブック・グループスレッドに避難所から投稿し、当時、全国の住民ディレクターのまとめ役だった東京都杉並区の高橋明子は、グループスレッド名を「熊本地震対応」に変更。以後、ここが全国の住民ディレクターやサポーターの情報拠点となっていきました。

その後、岸本は東峰テレビの梶原愛理と川原亜美に東峰村の状況を尋ね、放送業務に支障がないことを確認します。次に澤と高橋に連絡し、避難所から岸本と澤がスマホで中継し、高橋がデスクを務める体制でスマートフォン中継に踏み切ります。そこで岸本が構想したのは、『官兵衛で國創り』で活用したインターネット会議システム・ハングアウトとスマホ中継を組み合わせる方法でした。チャットルームの立ち上げや中継画面のスイッチングは、普段から慣れていた梶原と川原の二人に託されました。

地震発生から11日間、続けられたスマホ中継は、マスメディアの災害報道とは明らかに視点の異なる、「被災当事者による災害情報のカタチ」を生み出したと言えます。



▲避難所のスマホ中継と全国各地を繋いだ絶妙の仕組みが生まれた

▲どう伝えるか？避難所の日々が変わる定点中継に徹した

▲震源地益城町の知人の被災状況を伝える澤啓子さん

▲村民たちの役者ぶりにNHKスタッフは舌を巻いていた!?

▲裏方も村民役者たちが大活躍した

住民ディレクターの日常を描いたNHKの地域ドラマ。

2017年新春、NHK福岡放送局制作の地域ドラマ『たからのとき』が放映されました。これは東峰村を舞台に、東峰テレビを原案にしたドラマであり、女優・寺島しのぶが演じる住民ディレクターの主人公とその家族の物語が描かれます。東峰テレビ局舎や住民の自宅など、東峰村の様々な場所がロケ地となり、本物の住民ディレクターである村人の梶原京子や上野恵梨奈への取材をもとに脚本が制作され、村人たちもスタッフやエキストラとして多数が参加するなど、村をあげての協力体制で制作されました。右のQRコード<3>からNHK地域ドラマ『たからのとき』メイキング動画が視聴できます。

▲寺島しのぶさんらの記者会見が東峰村役場で!!

ドラマの「とうほう村テレビ」の完成シーンに村民役者が大集合▼

【☞地域の未来を輝かせる秘密、その2】

視野は広く。行動は素早く。悩まずトライ!!

災害時の安否・被災状況確認に、不可欠な情報発信拠点。

2017年7月5日、九州北部で線状降水帯が発生し、午後1時すぎ、東峰村に大雨洪水警報、午後3時、避難勧告が発令され、村は濁流や土砂崩れに襲われて多くの家屋、施設が被災し、3名の命が失われます。午後10時、土砂崩れにより、村の基幹情報インフラである光ケーブルが切断。地上波テレビもインターネットも見られず、東峰テレビからの送出も不能となりました。携帯電話も接続しにくくなり、村に至るすべての道路も寸断。新聞も届かず、東峰村は一時、「孤立村落」となってしまったのです。

▲「途方に暮れて撮った」自宅浸水で逃げられなかった和田さん

▲「山を知り水を知る」ところから出直そうと半年後にスタート

元東峰村役場の嘱託職員で福岡市在住だった上野恵梨奈の元に、安否確認の問い合わせが集中します。上野は自身のフェイスブックのタイムラインに「【東峰村・豪雨情況・掲示板】東峰村観光大使・福岡市より発信」と明示し、入手できる限りの情報を発信しました。この上野の迅速な対応は、住民ディレクターの修行時代に「この村は災害時に孤立する可能性がある」という岸本の言葉が記憶に残っていたからだそうです。

▲外出先から戻り、被災二日目に我が家に向かう70代の室井さん

▲被災時にお世話になった全国の皆さんへ「今」を伝え続けた

映す人と映される人、その境界を感じさせない映像。

大水害当日、出張していた岸本が東峰村に帰ったのは翌日の夜。次の日から岸本は、瓦礫や流木を乗り越え、村内をめぐって被災状況をビデオカメラとスマホで撮影し、フェイスブックで発信し続けます。この映像が右のQRコード<4>から見られます。

岸本の撮影方法はいわゆる「住民ディレクター方式」です。被災跡を片づける人を見かけると、小型ビデオカメラの録画ボタンを押して近づき、気遣いの声をかけます。映す人、映される人という境界が消えているような映像には、マスメディアによる取材とは違う、素顔のままの村人の姿が記録されています。しかも、誰もが岸本の見舞いを喜び、カメラに向かって被災時の気持ちをとうとうと語るのです。多くの村民からは笑顔まで見られました。

【☞地域の未来を輝かせる秘密、その3】

記録は未来への、確かな資産となる。

被災状況の映像を残し、復興への道標(みちしるべ)を模索する。

東峰テレビが復旧したのは2017年8月。岸本が撮り続けた映像は地区ごとに編集され、『被災から復興への道のり』として放送されました。これをきっかけに村人が被災直後から撮り続けた映像、写真が、東峰テレビに寄せられるようになりました。災害で大変なときにもかかわらず、住民ディレクターと同じように、多くの村人たちが被災の記録を残そうとしていたのです。つまり、地域で着実に活動していた住民ディレクターの視点とノウハウが、発信番組を通じて自然に一般の村民にまで浸透していたことが分かりました。

東峰テレビでは、九州北部豪雨から3年間で5本の災害特別番組を放送しています。いずれも、被災、復旧、復興に関わったさまざまな人々がスタジオで語り合いながら、同時にインターネット中継で各地をつなぐという得意のスタイルです。こうした積み重ねから、復興の課題や方向性などが村民全体に共有されていきました。豪雨から半年後、3年後の特別番組を、右のQRコード<5><6>から見ることができます。

▼農村共同体が強さを発揮!! 阿吽の呼吸で協力し合った

▲奥の右側に見えるのはJR日田彦山線の筑前岩屋駅舎

村民にまで浸透した、住民ディレクターの視点とノウハウ。

▲

◀住民ディレクターは「暮らしの知恵の受発信生活を豊かに」(『住民ディレクター追走25年史!! 凡人力の群像』表紙から)

メディアを生活道具として使いこなす、住民ディレクターの底力。

“地域おこしテレビ”として注目される東峰テレビ。

全国で地デジ化が進められていた2010年に開局した東峰テレビは、「村民みんなで創るテレビ」をスローガンに掲げ、“地域おこしテレビ”として多彩な活動を展開してきました。ときには既存の全国規模のテレビ局と連携した番組制作や、災害時の独自手法による情報発信などによって、注目を集めてきました。その活動で中心的な役割を担ってきたのは、養成講座を受け、取材経験を重ねてきた東峰村民の「住民ディレクター」です。

この住民ディレクターについて、岸本は「身近な日々の暮らしの知恵を受発信しながら、交流、行動することで暮らしを豊かにしていこうとする人たち」のことだと言います。日常的に村民、集落の動きを把握している住民ディレクターは、最新の取材をもとに番組としてまとめて情報発信することで、地域の活性化に貢献できるのです。

▲出会いが増え、映像素材収集

▲鍛えられる整理、構成力

番組づくりが、地域づくりの企画力を養成する。

ここで注目してほしいのが、住民ディレクターとして番組づくりに携わる活動が、実は地域づくりの企画力の養成につながるということです。番組づくりはまず、自分のアイデアを整理して企画書にまとめる企画提案からはじまり、そのアイデアを提案し、スタッフたちと議論することで多様な視点を身に着けます。続く事前調査と撮影取材では、新しい人との出会いがあり、映像データの構成・編集で、表現の難しさと面白さを体得。そして、放送時のスタジオリポートでは即興の表現力を養い、番組への反応や反響を受けて表現方法を磨き、さらに、再挑戦を重ね、継続して発信力を強化していくのです。

本番の放送ではキャスター、カメラマン、ディレクターをはじめ、スィッチャー、ミキサー、プロデューサーなど、多くのスタッフがそれぞれの役割を果たします。つまり、スタジオワークはチームでつくるものであり、自分の立場と役割とともに全体的な流れを把握する訓練の場となります。総合的な視野から全体像が見えることで、自分の存在位置が確認できます。こうした経験の積み重ねを通して、地域の視点から発想し、表現し、展開する――。これこそがパワフルな住民ディレクターの原動力となるのです。

▲自分の企画アイデアを提案

▲感想や批評を受け意外な気づきが

テレビは「見るもの」じゃなくて、「使うもの」である。

住民ディレクター養成講座の最初に、岸本が受講生たちに語る三原則があります。「押せば映る」「身体がカメラ」「番組はオマケ」です。つまり、映像を撮ることを難しく考える必要はなく、カメラの赤いボタンを押せば映る。撮りたいものには身体ごと近づいていこう。番組をつくることが目的ではなく、地域を発見し、人と交流するプロセスが大事なのであって、番組は結果としてついてくる、ということです。この三原則を核心にすえて、地域の人々と日常的に交流し、地域の事情を知り尽くした住民ディレクターだからこそ、展開できる地域づくりがあるのです。

もう1つ、岸本がよく口にする言葉に、「テレビは『見るもの』じゃなくて、『使うもの』」があります。テレビをはじめとするメディアを、それ自体が目的ではなく、地域おこしの「生活道具」として捉え、いかに効果的に使うのか、ということが重要だ、と強調します。テレビ番組の制作プロセスを通じて、企画力と行動力、社会性を身に着けた住民ディレクターが、多彩なメディアの特性を活かし、駆使することで新しい可能性が生まれます。日常の人的交流、情報収集、課題意識をベースに番組づくりに取り組むことで、解決型の地域づくりがパワーアップします。さらに、特に災害時には情報収集力、危機対応力に人間力の大きさが現れてくるのです。

【☞地域の未来を輝かせる秘密、その4】

知恵をしぼれ。使えるものは、とことん使え。

「企画は村民」、「技術はプロ」。DX時代のメディア変革。

『ふらっと九州☆東峰村』は、全国唯一の本格地域おこし番組。

九州北部豪雨から3年後の特別番組では、主なインフラの復旧に目途がつく中、「むらびと未来力」をテーマとして復興から創生に向かう転換点と捉え、棚田まもり隊や災害伝承館の前向きな活動などを取り上げました。

新しくスタートした番組『ふらっと九州☆東峰村』では、こうした「むらびと未来力」を子どもたちに継承し、DX（デジタル・トランスフォーメーション）時代の新たな地域活性化の可能性を模索しています。東峰村の村民、出身者をはじめ、共感してくれる村外応援団や全国で活躍する住民ディレクターが結集して制作する、全国で唯一の本格的な地域おこし番組です。

これまで東峰テレビの番組制作では、住民ディレクターがすべてに関わり、リードしてきました。この『ふらっと九州☆東峰村』では、村民自身が素顔で語る村の実情報告を企画の中心に置き、住民ディレクターはスタッフとしてサポートします。映像・音響・進行などの技術面は、これまで仕事を超えて交流を深めてきたプロのスタッフが、強力に支えます。つまり、「企画は村民」、「技術はプロ」という、全国でも初めての新しい番組制作のスタイルが生まれています。さらに、東峰テレビでは地域おこし協力隊の活躍が目覚ましく、全国的にもほぼ例のない、移住者による番組制作の試みも多種多様に行われています。

▲村のファンや応援団を増やす番組づくり

▲東峰テレビ2階にできて高齢者が集い、デジタルで元気に

▲中心にコワーキングスペース、ユーチューバースタジオも

全国の東峰村のファンを、「バーチャル村民」と捉えよう!。

すでに東峰村のファンとなり、応援団のように支援している人々との交流と関係性を深め、東峰村を“自分のふるさと”と感じてもらい、復興・創生のサポーターとなってもらえるきっかけを、番組を通して提供していきます。さらに、この村外応援団の人々を「バーチャル村民」「セカンド村民」と捉え、さらに“深いご縁”を結んでいくのも、この番組の役割と言えます。これまでにない画期的な仕組みで制作する『ふらっと九州☆東峰村』は、全国の自治体や地域活動グループ・団体とも連携することで、地域おこしのモデル番組となっていくことでしょう。

▲VRから高感度カメラ、アクションカメラまで揃えている

注目のデジタル拠点と連携し、移住・定住の促進へ。

新型コロナウイルス感染症の拡大をきっかけに、オンライン会議やリモートワークなどの「新しい働き方」が広がり、都会から地方への新たな人の流れが生まれています。この動きを移住・定住促進へとつなげるため、福岡県が中山間地モデルとして、2022年6月、東峰テレビの2階に整備したのが、デジタル拠点「テレワークテラス宝珠」です。右のQRコード<7>から、先進デジタル拠点の紹介が見られます。

地域の資源やニーズを活かした新たなビジネス創出を支援するため、都市部と同等のデジタル環境を実現。ワークスペースやWeb会議室、撮影スタジオを備え、4Kビデオカメラなどの機材も充実しています。斬新な事業領域を開拓する企業数社がすでに入居し、全国的なネットワークを活用したビジネス展開もはじまっています。また、この施設の管理人は元地域おこし協力隊の移住者が務めており、番組制作やネットワーク業務のサポートスタッフとして活躍しています。

独自の地域メディアと地域おこしモデルの提案。

▲

「テレビで地域おこし」という新しいテレビ文化は、見方を変えれば、地域活性化にテレビ的なノウハウを取り入れることで、どの地域でも実現可能な手法だと言えます。東峰テレビではケーブルテレビを軸にCS衛星放送、インターネットテレビ、Googleハングアウト、YouTube、さらにFacebookやTwitterなど、多様なメディアで番組を同時配信してきました。

これは企画、コンテンツさえしっかりしていれば、組み合わせ次第で他にはない独自の地域メディアとなり得ることを示唆しています。この分野で先駆者として全国をリードしてきた東峰テレビは、いよいよDXまでも視野に入れ、地域おこしの道具として開拓してきたノウハウを、全国の自治体や地域・社会活動に有効なモデルとして提案していきます。デジタルに特化したさまざまなプロジェクトと連携しながら、東峰村への移住・定住の促進につながる、多彩な情報発信が展開できるはずです。

※デジタル・トランスフォーメーション：デジタル技術を社会に浸透させ、社会や生活をより良いものへと変革すること。

【☞地域の未来を輝かせる秘密、その5】
あわてない。あなどらない。あせらない。

自分自身を知り、仲間をつくり、地域が「他人事」ではなく「自分事」になる。

住民ディレクターとして番組づくりに携わることが、地域づくりの企画力の育成につながると言いました。
それは番組づくりに次のような効果が期待できるからです。

(1)自分を知り、自己表現のノウハウを身に着ける。
番組づくりを通して自分自身の特性、個性、視点を発見しながら、自己表現のノウハウを学びます。

(2)当事者として表現・発信するから成長する。
住民ディレクターの番組づくりは、傍観者や客観的なものではなく、自らが当事者として主観的に表現するもの。自分の表現に責任を持つからこそ、成長するのです。

(3)知らない人との交流で、仲間づくりが進む。
数多くの人、スタッフ、関係者と交流しながら番組づくりを進めますから、本音で付き合える仲間が増えます。

(4)地域との関わりを深めることで、地域が「自分事」になる。
地域との関わり方が少なく、地域での付き合い方が分からないという人も、番組づくりの実践を通して積極的に地域と関わることで、地域を知り、地域が「他人事」ではなく「自分事」になります。

(5)自分のオリジナル番組をつくり、展開できる。
動画映像は文章や静止画よりも有効な伝達手段であり、テーマを的確に表現できます。自分ならではの完全オリジナルの番組づくりが可能であり、仕事に活用したり、ホームページやSNSなど、さまざまなメディアにも展開できます。

改めて住民ディレクターを、深掘りしてみると…。

▲子どもたちの未来は地域おこしの聖地か?

▲番組で子どもたちの動きを見える化している

住民ディレクターとは、「生き方そのもの」である。

しかし、これまでに示した項目は、決して根幹ではありません。最も重要なことは、住民ディレクターとは「生き方そのもの」ということです。これからの人生、自分は何を大切に生きていくのかが問われる、ということです。

人と交わり、地域を学び、現実に目を向け、課題と向き合う…。これまで知らなかった事実と出会い、自分は何をすべきだろうかと考える…。つまり、自分のまわりのすべてをポジティブに受け入れ、明るく前向きに考え、話し、動くことから、住民ディレクターの道は、はじまります。

住民ディレクターはボランティア活動的にはじまり、その後、少しずつ徐々に成熟していきます。人によっては仕事につながる場合もありますが、ボランティア的精神がないと、継続するのは難しいでしょう。好奇心とチャレンジ精神が活動の原動力となるのかもしれません。

[生き方は村の人口分あることを尊重すること]

【☞地域の未来を輝かせる秘密、その6】
こんなに難しいことは、自分にしかできないはずだ!!

地縁社会とデジタル縁社会を、統合・深化する仕組み。

テレビにできること、できないこと。そこから一歩、前へ。

13年半の熊本県民テレビ時代、岸本は記者、カメラマンをはじめ、ディレクター、プロデューサー、営業、総務など、テレビに関わるあらゆる仕事を独自に経験し、その結果、テレビは使える「生活道具」であると確信します。自分が暮らす地域をより幅広い視野で見直し、新しい気づきを発信していくことなど、テレビの無数の可能性が見えてきたと言います。

テレビ番組は大きく3つに分かれます。(1)ニュース・ドキュメンタリー番組は地域の課題を追求します。(2)ドラマ番組はフィクションで未来像を「見える化」します。(3)スタジオ・バラエティ番組は地域住民の語り場となり、コミュニケーションの深化に役立ちます。

当初から岸本が、住民ディレクターの活躍の場と想定していたのは、スタジオ・バラエティ番組でした。鮮度のいい地域の暮らしの知恵や情報を、当事者視点で取材し、住民自身がスタジオから臨場感たっぷりにリポートすれば、地域の現状や課題などが、住民に無理なく自然に届けられるはず、と考えていたからです。

テレビ番組の取材、編集、放送では、(ア)地域の情報を正確に捉えるための取材力を養うこと、(イ)映像による幅広い表現力を身に着けること、(ウ)実現までの行動力に磨きをかけること、という3つのことが重視されます。なかでも、最も大切な(ウ)は、日常的な実践を通して培われるものであり、この能力に優れているのは、いつも共同体の課題に向き合っている地域住民だと言えるでしょう。

▲スタジオは様々な立場、老若男女の交流の場

そこで、(ア)(イ)はテレビ局でノウハウを身に着けた岸本が、地域住民に指導することにしました。(ウ)は地域住民が潜在的に持っている力であるとして、住民ディレクターが新たに獲得すべき力は(ア)と(イ)だと考えたのです。こうして、豊富な経験をベースに練り上げた住民ディレクター構想は、その後も徐々に成熟を重ねていくことになります。

「関係人口」と「オンライン交流」が新たな可能性を拓く。

「初めて住民ディレクター養成講座を開催した27年前、実は『スマホのようなもの』の登場をすでに予想していました」と岸本は振り返ります。「その時代になれば、老若男女、あらゆる分野、業種の境なく、この住民ディレクターの手法で、誰でも家族や地域のみなさんと豊かな暮らしを創造する環境ができる。さらに、地域貢献、社会貢献につながり、世界中のみなさんとのネットワークを紡ぐ、新しい仕事をはじめる『起業家』の登場を想像しました」と、世界的ネットワークの可能性について語っています。

▲村民の友達の輪が列島、世界へ広がることを見える化

グローバルな構想も含めて、岸本が思い描くネットワークには、重要なキーワードとして「関係人口」と「オンライン交流」が登場します。

東峰村の出身者をはじめ、何らかの縁で村との関わりを持っている人が「関係人口」です。たとえば、小石原焼・高取焼や竹地区棚田、岩屋キャンプ場のファンなど、村に何らかの共感を抱く人、東峰テレビの視聴者や関係者、全国の住民ディレクターなども「関係人口」と捉えます。

いわゆる交流人口に加え、こうした村外ファンや応援団である「関係人口」を「バーチャル村民」と考え、さらなる「ふるさと愛」を呼びかけ、村の農産品・特産品の購入や移住・定住などを働きかけていくのも、新たなふるさと創生のチャンネルと考えられます。

急速に進化するICT、デジタル環境の中で、拡大し続けるネットワークを通じて、新しく村と縁を結ぶ人は爆発的に増加します。こうした人々は、まさに「バーチャル村民」であり、常に「オンライン交流」を継続する仕組みづくりが、今後の創生プロジェクトの成果を左右します。東峰テレビの『ふらっと九州☆東峰村』は今後、「バーチャル村民」との交流深化の鍵を握るキーチャンネルとなるはずです。そして、いつかその人たちとも東峰村の大地でリアルに出会い、現実の関係性を結んでいくことでしょう。

【☞地域の未来を輝かせる秘密、その7】

「関係人口」と、より濃密な関係を育てよう!!

▲「ひと、光る。」はくまもと未来国体のスローガンだった

「一人一人が個性を発揮し、輝いて生きることが地域活性化につながると考え、個の内面を磨くと同時に、地域、社会、世界との関わりの中で自由に生きられる環境を創るための現場力、実践力を身に着ける動きを総合的にプロデュース。

プリズムでは國(くに)は『地域』と捉え、町内会、市町村、都道府県、日本、世界、宇宙と伸び縮みしながらも、すべてが一つにつながる象徴を國と表現しています」。

この企業理念には、地域おこしを通じて人々が自由に輝いて生きられる環境を実現しよう、という熱意と情熱があふれています。プリズムが想定している國という概念には、身近なコミュニティから広大な宇宙まで、自在に伸縮・拡大する地域の連続性が的確に反映されています。

ひと、光る。國創り―。全国、世界へ。

個の内面を磨き、自由な環境を創造する。

熊本県民テレビを退職した1995年、岸本は任意団体「まち創り応援団ぷりずむ」を設立し、代表に就任。地域おこしの活動に取り組みはじめ、2000年の有限会社設立を経て、2008年、株式会社プリズムに改組しています。

株式会社プリズムの創業時に掲げられたのが、「ひと、光る。國創り」という企業理念です。それが意味するものは、次の通りです。

最先端人材の世界ネットワークを構想。

さらに、0000年、一般社団法人「八百万人(やおよろずびと)」という組織も立ち上げ、理事長に就任していますが、こちらは住民ディレクターの全国ネットワークです。日本には古来から郷土の守り神として、八百万の神々がいるとされています。同じように人間も、八百万人の人々がいるだろう、ということから名付けられています。

▲東峰村を応援してくれる人たちへ、心のメッセージ発信

▲東峰村を第二のふるさとにしてもらうための発信を!!

将来的には海外にもネットワークを普及し、800万人のネットワーク構築を目指すという気持ちも込められています。それぞれの資質を生かした総合扶助のネットワークが広がれば、あらゆる課題を共同で解決するコミュニティが創造されるはずです。進展するグローバル社会を見据え、未来社会に対応する最先端人材ネットワークを構想した世界ネットワークを目指しているのです。もちろん、その中心にはごくふつうの人々が幸せに暮らしています。

必要なときに、必要な人を募る「この指とまれ」方式。

さまざまな組織で取り組むプロジェクトの遂行では、実施項目に応じた最適な人材の確保が、最重要課題となります。その人材を選定する方法の1つに、「この指とまれ」方式があります。これは実施スケジュールに合わせ、テーマ毎に遂行者を募集し、必要な人数と最適な人材を選び抜き、スタッフの意志を統合し、プロジェクトを進めていく方法です。そして、プロジェクトが完了したところで、このチームは解散します。

この「この指とまれ」方式の利点は、老若男女を問わず、さまざまな立場の人が自由に参加できること、完了後に解散するため、常に新しい人材の募集が可能となり、期間、内容、規模、予算などに応じて、フレキシブルにチーム編成ができることにあります。必要なときに、必要な人を募り、誰もが自由に参加できる「開放系」フィールドの創造につながるのです。

▲東峰村はミラクル
◀パワースポットです

【☞地域の未来を輝かせる秘密、その8】
神様仏様の神通力も、有効に活用すべし!!

▲被災時はまず15集落を見舞いに歩き、「のち取材」精神で

▲表彰もうれしいですが、村民の喜ぶ声が一番の励ましに

▲何事も飲まんばはじまらん!!東峰テレビの宴会場で

▲実践されないなら行きません。25年前からの断り文句

「住民ディレクター」を創始した総合プロデューサーの軌跡。

令和3年9月3日（金） 熊本日日新聞

福岡・東峰テレビの岸本さん（元KKT）

住民ディレクター育て25年

地域活性化に尽力 放送文化基金賞を受賞

大自然と交流し、知恵を育む人間力を発掘!!

「ICTの世界では情報の受発信とよく言われますが、情報は一過性のもの」と捉える岸本は、「知恵は土地に根付き、または暮らしの中で生まれ、受け継がれていくもの。大自然と交流し、人間が本来もつ生きる知恵を受発信する主体的な人材が、本当に豊かな地域を創造する」と考えています。さらに、「住民ディレクターは、豊かな地域を創造する地域づくりのディレクターであり、同時に暮らしの知恵の発信者でもある」と言う岸本晃とは、どのような人物なのでしょうか。

1982年に入社した熊本県民テレビ時代から、『ズームイン!!朝!』、『24時間テレビ』、『11PM』などの日本テレビ系列の全国番組の舞台でも、熊本視点を重視して活動しました。ローカル放送では、異能集団が地域を訪問し、活性化のアイデア提案と実践をサポートする『花咲か一座の豪快TV』、住民主体で地域のオリジナルドラマを制作する『テレビドラマを作ろう!』など、全国初の企画を多数プロデュースしました。

同時に入社から5年間で、熊本県内98市町村を2周半めぐった経験から、田舎の大自然の中で働く人々の大いなる人間力に気づき、テレビの可能性と限界を認識します。その後、13年半の民放在職中、地域づくりの手法としてテレビの可能性に着目し、住民が番組づくりの経験を通じて総合的な企画力を養う「住民ディレクター」を提唱しはじめたのです。

地域づくりに向き合う、ブレないプロフェッショナル魂。

1995年に民放退社後、人吉球磨広域行政組合の職員を対象に初めての「住民ディレクター養成講座」を開催。ちなみに、この企画書で初めて「住民ディレクター」という言葉が登場しました。農業体験ツアーの様子を番組にした『田舎の贅沢体験塾』を、熊本ケーブルネットワーク「使えるTV」で放送。熊本県から「くまもと未来国体」のメディア総合プロデューサーに任命され、住民ディレクター&キャスターによるイベントFMラジオ局「FMみらい」をプロデュース、放送しました。さらに、熊本朝日放送で住民ディレクター&キャスター方式の国体情報番組『人、光る。にゅーす』、および住民ディレクター番組『新発見伝くまもと』をプロデュース、放送するなど、人間力を要にした多彩な企画を展開してきました。

その後、2008年に株式会社プリズムを設立。この前後から「住民ディレクター養成講座」のプロデュースを精力的に展開。各地からの要請に応え、全国行脚時代が始まり、これまでに訪れた地域は34都道府県に及んでいます。こうして35年もの間、変わることなく地域づくりに、プロフェッショナルとして取り組んできています。

▲行脚は楽し、繋ぐも楽し、列島で世界で交流を目標に

＜主な履歴と受賞歴＞

★総務省地域情報化アドバイザー（2011年～）
★総務省地域力創造アドバイザー（2012年～）
★ICT総務大臣懇談会構成委員（2011年2月～6月）
★日経地域情報化大賞・日経新聞社賞受賞（2003年）
★第6回東京商店街グランプリ受賞（2010年）
★総務省・九州総合通信局長賞（2013年）
★総務省地方創生に資する地域情報化大賞・総務大臣奨励賞（2014年）
★放送文化基金賞個人賞受賞（2021年）

自然な感覚と自由な意志が、新たな展望を拓く。

人物を取材するとき、できるだけ自然な表情で、身構えることなく話してもらえるよう、住民ディレクターは常に心がけます。なぜなら、自然なリアクションや飾らない言葉は、新鮮な驚きをもたらし、思いがけない気づきや発見につながることがあるからです。このように常識に捕らわれず、自然な情報発信を核とするメディアを、私たちは「Natural Media（ナチュラル・メディア）」と呼びたいと思います。

文字通り「Natural　Media」では、参加者の自然な発想、議論、展開に価値を見出します。人を束縛する常識、規制、抑制から解き放たれ、自由になることから新しい展望が拓けます。こうした「Natural　Media」に育まれる共同体を、私たちは「Natural　Media　コミュニティ」と名付けます。自然な感覚と自由な意志で、参加者それぞれがメディアと向き合うことで、「住民参加」から「住民参画」へ移行し、やがては「住民主体」へと発展し、成熟していくことを期待しています。

東峰テレビは人と人との縁を発展のエネルギーとして成長してきました。東峰村の村民、出身者をはじめ、テレビのスタッフや関係者、村外ファンや応援団、特技を持つ専門家や支えてくれるボランティアさん、全国に広がるオンラインメンバーや行政・団体・企業の協働者たち…。こうした熱い人々に見守られ、支えられながら、私たちはこれからも人と暮らしに向き合い、新しい芽吹きを応援していきます。

待ち望まれる「Natural Mediaコミュニティ」の誕生。

住民ディレクター・ミニ年表

▼1982年（昭和57年）2月
熊本県民テレビに岸本晃入社
▼1989年（平成1年）
住民手作りドラマ『平成元年のタイムスリップ』制作
▼1991年（平成3年）10月
『花咲か一座の豪快TV・山江村の巻』放送
▼1994年（平成6年）1月
免田町住民参加ドラマ『テレビドラマを作ろう！（熊襲復権ドラマ）』放送
▼1995年（平成7年）9月
熊本県民テレビを岸本退社
人吉球磨広域行政組合職員を対象に「住民ディレクター養成講座」を企画
※この企画書で「住民ディレクター」という言葉が誕生
▼1997年（平成9年）
岸本は「くまもと未来国体」のメディア総合プロデューサーに就任
▼1999年（平成11年）4月
住民ディレクター・キャスターによる国体情報番組『人、光る。にゅーす』放送開始
10月　国体イベントFMラジオ局「FMみらい」開局
▼2000年（平成12年）4月
住民ディレクター番組『新発見伝くまもと』放送開始（熊本朝日放送）
▼2003年（平成15年）10月
住民ディレクターのインタネット放送局「山江村民てれび」開局
▼2004年（平成15年）10月
IT見本市「CEATEC　JAPAN」に『地域づくりの道具箱展』と、住民ディレクターによるネット放送局『ユビキタス村TV』を出展
▼2007年（平成19年）2月
東峰村で「住民ディレクター養成講座」が開催される
▼2010年（平成22年）11月
村営の村民による「東峰テレビ」開局・開局特番生放送
▼2012年（平成24年）5月
『東峰村発！創発の地域づくり～住民ディレクター30元5時間中継～』放送
▼2014年（平成26年）1月
大河ドラマ追走番組『住民ディレクター発！官兵衛で國創り』開始
『住民ディレクター発！大河ドラマ追走番組プロジェクト』が、総務省の「地方創生に資する地域情報化大賞」奨励賞を受賞
▼2016年（平成28年）4月
熊本地震で被災した岸本と澤啓子が、被災地から被災情報をスマホ中継
▼2017年（平成29年）1月
NHK福岡地域ドラマ『たからのとき』放送
7月　九州北部豪雨により、東峰村は孤立村落に。岸本は村内全地域を歩いて被災状況を撮影し、SNSで発信
▼2018年（平成30年）6月
『東峰テレビ特別番組～被災から1年、今』放送
▼2020年（令和2年）7月
『九州北部豪雨3年東峰テレビ5時間ライブ～むらびと未来力～』放送
▼2021年（令和3年）6月
岸本が放送文化基金賞個人賞受賞
▼2022年（令和4年）11月
東峰テレビとYouTubeで生放送する『ふらっと九州☆東峰村』放送開始

◆発行元：**株式会社プリズム**
〈2023.7.15発行〉
◆制作協力：古川柳子、
サテマガ・ビー・アイ株式会社、
住民ディレクター25年史プロジェクト
◆取材・編集・デザイン：梅村制作室
◆著作：株式会社プリズム

★「住民ディレクター養成講座」について、右のQRコードからアクセスしてください。